



TITLE:

<大會抄録>明代の南京都察院について

AUTHOR(S):

間野, 潜龍

CITATION:

間野, 潜龍. <大會抄録>明代の南京都察院について. 東洋史研究 1980, 39(3): 608-608

ISSUE DATE:

1980-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153785>

RIGHT:

これらのパルチザン運動の中で、西アナトリアにおけるそれは、しばしば、エフェあるいはゼイベキといった呼稱をもつ人びとによって指導されていた。これについても、すでに山内昌之氏によって、祖國解放運動における諸勢力の中で、非體制内分子という形で位置づけられ、運動におけるその役割が十分に明らかにされているが、これらの起源や西アナトリア社會における位置づけはまだ行なわれていない。

本報告では、十九世紀後半の西アナトリア社會におけるエフェ・ゼイベキの活動をとりあげ、その社會的位置づけを試みる。

餡茶・散茶・末茶・餅茶——製茶の歴史——

布 目 潮 風

現在世界で飲用されている茶をその製法から次のように四大別することができ。 (一) 綠茶、(a) 釜炒茶 (中國風)、(b) 蒸茶 (日本風、番茶、煎茶、玉露、碾茶)、 (二) 烏龍茶 (半醱酵、鐵觀音)、 (三) 紅茶 (醱酵茶)、 (四) 團茶 (磚茶、綠茶系、紅茶系)

一方において、唐代 (八世紀後半)、陸羽の『茶經』六之飲には、茶を分類して、

飲有餡茶・散茶・末茶・餅茶者。乃斫。乃熬。乃燂。乃舂。

とある。これは製茶された結果の製品の形状による命名と考えられる。餡は粗に通じ、餡はもつとも製法の簡單な葉茶、散茶は餡茶よりやや入念に製造した葉茶で、餡茶・散茶は番茶・煎茶の區別に比

定できよう。末茶 (わが國の沫茶である碾茶とは異なる) は搗鉢で搗るのと、木製の藥研で研るのと二通り考えられる。餅茶は陸羽の提唱する高級茶で、茶葉を蒸して杵臼で餅し、小さく丸めて乾燥した一種の團茶である。(これを飲む時は藥研にかけて粉碎する。)

本報告においては、『茶經』に見える前記四種の茶の製法から出發して、宋代の片茶と散茶、元代の茗茶・末茶・蠟茶とは何か。明代以來、葉茶が盛行し、團茶・末茶が行われなくなった事情、およびわが國で現在飲用されている沫茶の源流は以上の内何處に求めたらいいか等について卑見を開陳したい。

明代の南京都察院について

間 野 潛 龍

中國における行政監察は、秦漢以來國家組織の中の重要な柱の一つであり、ながく御史臺の名で行われてきた。しかし明の太祖は胡惟庸の變以來大幅な行政組織の改變を行った中で、御史臺も新しい都察院體制にとりかえた。成祖以後國家の中心は北京に移ったが、南京における都察院も他の行政組織とともに残され、明末まで繼承された。今回その南京都察院について、具體的な資料にもとづき明代史の中にどのような役割を果たしたかを検討したい。